

2014年度「写真」部門 作品情報一覧

■独立行政法人国際協力機構理事長賞

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
蓑田 竜史	釜山日本人学校	イメージをひっくり返す！ 陰の中にも光を見いだした元気の国、 バングラデシュ！	バングラデシュ	JICAの教師海外研修に参加させて頂き、バングラデシュについて学ぶ機会を得たが、それまでのイメージと全く違っていた。物質的に豊かではないのは確かであるが、活気があり、この国のエネルギーには驚かされた。どこへ行っても、人々の目は輝いており、未来は決して暗いものではないことを語っていた。日本を始め、外からの援助も多く見受けられたが、最終的にはこの国の人たちが自立しなくてはならない。そのために、どんなサポートができるかを考えないわけにはいかなかったが、世界の人に、バングラデシュの力・明るさを知らせることは優先事項である。

■独立行政法人国際協力機構地球ひろば所長賞

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
東 航平	美浜町立河和南部小学校	今を生きる	ネパール(ダデイン郡)	「途上国」と聞くと、どんな印象をもつでしょうか。貧困や紛争といったマイナスのイメージが大きいのではないのでしょうか。私は1年9か月、ネパールの村で教育に関わる活動を行ってきました。その中で一番印象に残ったことは、子どもたちが今を全力で生きている姿でした。学校に通うのに山道を2時間歩いて来る児童もいる。カバンや消しゴムも買えず、えんぴつ一本だけをポケットに突っこんで来る児童もいる。それでも、彼らが遊びや勉強に全力で取り組む姿、笑顔に輝きを感じました。技術やシステムが進歩し、物質的にも豊かな日本とは正反対。そんなネパールと日本の子どもたちの生活を比べてみるとどうでしょうか。「豊かさや幸せって何だろう」と、改めて考えるきっかけになればと思います。

【入選】

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
山岡 智互	アイ・シー・ネット株式会社	楽園の裏側	パプアニューギニア	パプアニューギニアは自然の豊かなとても美しい国です。有袋類が多く生息し、固有種も多い生物の楽園です。まだまだ開発の波はそれほど届いていませんが、その脆弱な行政による廃棄物処理サービスと自然資源管理、住民個々の意識のなさ、自然に分解できない製品の氾濫、天然ガスの産出によるバブル経済など、放っておけば、だんだんとこの豊かな自然環境と生物多様性が破壊されていく事が懸念されます。 それに対して、JICAを始めとしたドナーや、NGOによる環境保護活動など、頑張っている人達も沢山います。この写真が、日本の皆さんに、そのような現状を考えて貰えるきっかけになり、そのうち一握りの人々でも、支援などのアクションを起こして貰えるきっかけになれば、これに勝る喜びはありません。
近江 佳永	青年海外協力隊	Water is Life.	ウガンダ(ムベンデ県、ルウエロ県)	<安全な水を手に入れられる環境の大切さを伝えたい> 今年1月より、青年海外協力隊員としてウガンダ共和国ムベンデ県に派遣されております。職種はコミュニティ開発(水の防衛隊)です。 日本はどこにでも水道があり、蛇口をひねれば簡単に安全な水が手に入ります。一方、ウガンダで日々目にするのは、村落部の住民が水を手に入れることは簡単ではなく、子どもや女性たちが水汲みという重労働を担っている現状です。 恐らく、今日本にいる皆様もテレビや書籍等を通じて、途上国では水道が普及しておらず、水汲みをする人がいるという状況を知っているかと存じます。私自身もその一人でした。しかし、実際に目の当たりにすると、その衝撃は非常に大きいものです。 また、6年前の2008年にもウガンダを訪れたことがあります。当時はNGOの海外ボランティアとして3週間ほどルウエロ県に滞在していました。寝泊りしていた学校には水道がなかったため、多くの近隣住民にまじって、近くの井戸から水汲みをしていました。現在、その学校には水道が設置され、また雨水タンクも建設されています。6年前に使用していた井戸はそのまま存在しており、近隣住民はやはりそこから水を汲んでいました。 自分の生活では当たり前のことも、他の国へ行くとそれは当たり前のことではなくなる。今回応募させて頂く写真を通じて、水というものが如何に大切であるかということ、少しでもお伝えできれば幸いです。

中央大学FLP崎坂 ゼミナール 災害班	中央大学	Bangladesh の障害者と自然災害	Bangladesh (ダッカ)	私達は昨年ミレニアム開発目標をテーマにして学びを進めました。ミレニアム開発目標が目標とする数値に達していたことから、Bangladesh は貧困状態から脱したと言われています。しかしBangladesh は依然として洪水やサイクロンなどの自然災害によって毎年被害を受けています。また、自然災害発生時において特に被害を受けやすいのは、社会的弱者である障害者です。東日本大震災時の宮城県における障害者の死亡率は、健常者の約4倍であったというデータが出ているため、そのことはBangladesh だけではなく、地震大国の日本でも当てはまりまるといえます。この作品を通して障害者の自然災害時のリスクを理解し、「災害と障害」へのアプローチの重要性を世界に広めていきたいと考えています。
---------------------------	------	----------------------	------------------	---

【佳作】

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
森田 智子	東洋英和女学院高等部	Bangladesh の子どもと未来	Bangladesh	世界最貧国とも言われているBangladesh には様々な問題があります。その中で私が最も重要と思った、子供への教育の問題や街にあふれかえるゴミの問題を今回とりあげました。日本の識字率はほぼ100%ですがBangladesh では66%ととても低いです。またイスラム国でもあるため特に女性への教育の意識が低く、これを向上することが今後のBangladesh の発展に重要ではないかと感じました。続いてゴミについてですが、Bangladesh では空き地や道路、道路のわきの溝などいたるところに山積みになったゴミを目にしました。そのため悪臭もしますし、人々はゴミの上を歩くため衛生的にもとても良くないと感じました。この問題はBangladesh の最重要課題ではないでしょうか。
清田 憲一郎	熊本市立五福小学校	Bangladesh の小学校	Bangladesh	2010年にBangladesh を訪れた際に小学校を回った。雨が降ると教室が水浸しになって休校になる。学校までの道が水没して登校できなくなる。狭くて暗い教室に男女別にぎゅうぎゅうに座って授業を受けなければいけない。牛小屋だったところに、とりあえず机といすを入れて作った薄暗い教室。教育大学の付属小学校なのに壁に黒のペンキを塗っただけの黒板・・・など日本では考えられないような小学校ばかりだった。日本の子供達が当たり前になっている立派な日本の小学校が実はとても恵まれていることに気づかせたい。そして、その恵まれた環境にある日本の子供達に「今、自分達にできること。」を考えさせるきっかけにしたい。
村上 彩	立命館大学	開発の陰で 一退去を求められるカンボジアのスラムに住む家族達	カンボジア(プノンペン)	「開発」という一見ポジティブな現象の陰で苦しむ人々、特に最貧困層の人々が直面している「困難」があるということ。
山崎 崇央	東京大学	タンザニアの「現場」から	タンザニア(ムトワラ州ムトワラ市)	日本から遥か12000km、アフリカ最高峰キリマンジャロを擁す国、タンザニア。旅行客が多く訪れる北部と比べ、南部はまだ貧しく、インフラも整っていません。そんなタンザニアでは、現在約60名の青年海外協力隊員の方が、様々な職種で活躍しています。今回の作品は、そうした現場の1つ、ムトワラ州にある公立中学校の理数科教師として、1ヶ月弱隊員の方と活動を行った際の写真です。決して物質的に豊かという訳ではありませんが、前を向いて、一生懸命勉強している子どもたちの姿がそこにはありました。スワヒリ語が通じなくても、英語がたどたどしくても、学んでいる数式と学びたい気持ちは世界共通です。遠く離れたアフリカの国で、日本に親近感を持ってくれている子どもたちのこと、そしてそれを支えている青年海外協力隊の方たちのことを、日本の子どもたちにもぜひ関心を持っていただければと思います。
渡辺 基郎	学習院大学	第一次世界大戦100周年ー現在、過去、世界、そして私たちの繋がりに	フランス、ベルギー	今年2014年は、人類史上初の世界戦争、第一次世界大戦開戦から100周年にあたる。帝国主義による世界の一体化、大量生産・大量消費と表裏一体となった大量破壊に特徴づけられるように、第一次世界大戦は現代の起点と言えるだろう。従属システム、総動員、ナショナリズム、ジェノサイド、新兵器、大量破壊等。国家がその総力を注ぎ込み、膨大な人命が失われたこの戦争が生み出した影響は、今なお私たちの世界に暗い影を落としている。本作品では、私が訪れた第一次世界大戦の戦場跡地の写真から、当時の戦争の激しさと、そこで死に直面していた兵士たちの過酷な状況を描き出す。その上で、当時の兵士が書き残した言葉より、戦災に苦しむ人に思いを馳せる。時代や地域、様々な差異を越えて、私たちが同じ世界で生きる人間であるということ意識することから、私たちと世界との「繋がりに」を想起し、国際協力への関心を促す一助としたい。
多田 拓歩	京都大学	貧困の中の豊かさ	カンボジア	2014年夏、学生プロジェクトpumpitの活動でカンボジアのダチョー村に小学校を建設しました。実際にカンボジアに行く前に私がこの国に対して抱いていた印象は、「発展途上国で貧しく、人々が苦勞している不幸の国」というものでした。しかし、実際に現地に行って小学校建設を行う中で私が出会ったカンボジア人は、貧しいものの、みんないきいきと幸せそうに暮らしていました。一方、経済的に豊かだけど幸福度の低い日本。帰国後、調べてみると、カンボジアの幸福度は日本よりも上位でした。確かに「経済的な豊かさ」は重要でしょう。しかし、それよりも大切なのは「心の豊かさ」であると、今回カンボジアを訪れて実感しました。先進国の日本が一方向的にカンボジアに対して支援して何かを与える、だけでなく、私たち日本人もカンボジアから学ぶべきことがあるのだと思います。それは「人は考え次第で、どんな場所でもどんな環境でも、幸せに生きることができる」ということ。人が本当に幸せになるために必要な、日本人に欠けている『心の豊かさ』のヒントになるものがカンボジアにはあるのかもしれない。

清泉女学院大学	清泉女学院大学	Bangladesh に小学校を建てる！ ～ 人と人の繋がりがからできること～	Bangladesh (クシュ ティア・ダンモルカバザー ル)	名前以外の何も知らない Bangladesh！ そんな国が自分たちにとってすごく大切な国になりました。きっかけはかつて JICA でそこに行った方の活動を新聞で知ったからです。その方の話を聞いて、感銘を受けて動き出しました。大学生だから出来ることは何かを、まず考えました。物資を近隣の高校などに呼びかけて集める。ペンやリコーダーなど、学校で使ってもらえるものを、スーツケースに詰めて手渡すことが出来ました。日本の高校生たちの気持ちも Bangladesh の子どもたちに届けさせてもらいました。そしたら、いっぱいの子どもの笑顔に囲まれるわ、想像もしない雄大な景色に出会えるわ、現地の人たちと身振り手振りで心が通じ合えるわ、、、このことを一過性にしないために毎週、仲間たちと次に出来ることを考えて、行動するまでになれました。
---------	---------	--	---------------------------------------	---

■協賛社特別賞

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
神 久実子	都立深川高等学校	イスラエル・パレスチナ～彼らの日常にあるもの～	イスラエル・パレスチナ	2014年7月7日から始まった、イスラエル軍によるガザ地区の空爆でパレスチナ問題に対する日本国内の関心も高まった。しかし、空爆が起こっているときだけが「紛争」で問題とされるべきで、空爆が終われば問題も終息するか、といえばそうではなく、占領や難民の問題は彼らの「日常」の中に組み込まれている。ニュースで見るときには、戦う兵士の姿や、攻撃によって傷ついている人々や破壊された建物ばかりが映し出されるが、彼らにも「日常」があり、生活があり、笑顔がある。そういった「普通」の人たちが、兵士となり戦ったり、日常的な差別に苦しんだり、空爆に怯えて暮らしたり、傷つかなくてはいけない、ということの問題点を伝えたかった。